

ART  
REVIVAL  
CONNECTION  
**TOHOKU** *Report*

アートリバイバルコネクション東北活動報告 2011.3-2012.4

# 演劇人から演劇人のために

ベルリン森鷗外記念館 ベアーテ・ヴォンデ

ドイツで暮らす大多数の人々と同じく、私たち日本学者らも、地震、津波、放射能汚染の三重苦の災害の映像に大きなショックを受けました。最初の週末はただただ、呆然とTVの画面を見凝めるだけで、自分の視覚に入ってくるものを信じることにすら出来ませんでした。あの出来事は今でも悪夢のようで、災害で亡くなられた方々や、大切な人を失って、これからも生きていかなければならない方々のことを考えると、いてもたってもいられない気持ちになりました。しかし、そんなときに私の本能のようなものが、自分にこう呼びかけました。「このショックから自分を解放するには、自ら立ち上がって、アクションを起こすしかない」と。

何年も前から演劇祭を開催しているライブツイヒの友人が、災害直後に国際演劇協会の内村賞を受賞しました。これ以上、TVの前でじっとしていられなかった私は、彼の元へと向かいました。国際演劇協会のベルリンの同僚が、私が日本学者で、日本の演劇界に友人が多いことを知ると、東北の演劇人とのコンタクトを取れるよう手伝ってほしいと私に頼みました。彼らは、何とかして被災者に力を貸したい、しかし、一般的な方法によってではなく、自分たちの仲間である、東北の演劇人に援助をしたいと考えていたのです。

ARC>Tの活動の何よりも良かった点のひとつは、迅速にHPを立ち上げたことです。それによって私たちは、現地の状況やそこに住んでいる人々、とくに演劇人の近況を知ることができ、幅広いネットワークを通じて、互いに声をかけ合い、本当に困っている人々に手を差し伸べる、活動の様子をドイツ語に訳し、伝えました。ドイツ国際演劇協会は急遽、有志グループを立ち上げ、ARC>Tに関する資料をもとに、募金の呼びかけをするためのスピーチを考えました。このスピーチは、世界演劇の日に、沢山のドイツの劇場にて俳優に読み上げてもらいました。

この募金活動によって集まったお金と、マイヤ・ブリセツカや基金から寄せられた募金が、少しでも現地の窮状が和らぐことを祈りつつ、ARC>Tの友人らに託しました。

またその後、演劇雑誌「テアター・デア・ツァイト（時の演劇）」に数ページに渡るARC>Tについての記事を寄稿し、

2011年9月に鈴木さんと、その他のARC>T代表の方々に、仙台でお会いすることができたのは、本当に嬉しいことでした。私はそこで、アクチュアルな問題についての意見を交わし、またトラウマを抱えた子供たちの、演劇活動を通じた学校でのワークショップも体験することができました。

募金活動を通して芽生えた東北とドイツの演劇界が、次に目指すべきは芸術的な交流であると考えた私たちは、東北の演劇人をドイツに招待することを企画しました。キールにて開催される一人芝居の演劇祭「モノドラマ・フェスティバル」に出てもらうことが叶えば、日本の東北の演劇界における問題を知ってもらう良い機会になったと思いますが、残念ながら劇団に関する資料が届かず、実現には結びつきませんでした。ARC>Tとドイツが将来、このステップアップを果たせることを、期待を込めて見守りたいと思います。

9月に仙台を訪ねたとき、私が見た限りでは、災害の爪あとやもう、ほとんど見かけられませんでした。しかし、もっと難しいのは、遠くに住んでいる人たちが、現地の人が抱えているトラウマを理解することだと思います。だからこそ、これからも私たちが様々な方法でお手伝いができるように、ARC>Tのホームページには今後も、アクチュアルな状況と活動を伝えていってもらいたいと願っています。

ARC>Tが、灰の中から甦った不死鳥のように強い力を得て、傷を癒し、苦しみを乗り越え、新しい演劇の形を生み出すことで、多様かつ独創的な東北の文化が育っていくことを願ってやみません。

